

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第198号（2022年11月）

常世の風に吹かれて呟いて（6） 白井啓治

（白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を

抜粋して連載します。）

『風が冷たく外に出たがらうゴロゴロ』

（2012年11月3日）

風が本当に冷たくなってきました。今日も一日晴れわたった空なのに、日差しもたつぷりあるのにひんやりと寒い。お猫様は当然であるがお犬様までも外に出たがらない。二人して陽だまりの縁側でゴロゴロ、ゴロゴロ。

我が家では、お猫様の順位が上なので、お犬様はそれに倣っているのだろうか。未だ炬燵を入れるほどではないが、炬燵を入れると、お犬様もお猫様に倣って炬燵に潜り込んでしまうのだろうか。去年の冬は、廊下のハウスにいたのであるが、今年は夏からずーっと家の中である。家の中の快適さがすっかり身についてしまったようだ。

読書の秋と言うが、このところ読む本の量が突然多くなった。この一週間でもう10冊以上読んでいる。読書も癖になるようで、読み始めると止まらなくなるようだ。小生読むのが早く、一日に二冊ぐらいは平気で読んでしまう。取り敢えず10冊15冊と買い込んで直ぐに読んでしまう。しかし、小生本は一回読んだら終わりということはなく、どんなに失敗したと思う本でも三度は

読み返す。気に入った本は、それこそ10回位でも15回でも読んでしまう。今夜は、もう読む本が無くなって、さて何を読み返そうかと思索している。今の季節、午後の一時を過ぎると陽が赤くなり、目にする風景の全部がうつすらと紅葉して見える。でも、うつすらとした茜は冬を呼ぶ色のように何処となく寂しい。

『柿の葉が夕焼けた』

白玉梅山葵をのせて喰った

（2012年11月4日）



（絵： 兼平智恵子）

色づいた柿の実を見るたびに北海道を思い出す。大阪を空襲から逃れて母方の北海道に疎開した。

昭和26年に東京に戻って来て、その後すぐに飛騨に越したのであった。本土に戻って来てなんて綺麗なんだと思ったのは柿の木につけた実であった。その頃、北海道には柿の木はなかった。葉の落ちてしまった枯れ木についている柿の実が夕日に照らされて見えるのは本当に美しいと思ったものだ。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。
木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178
伊東弓子 0299-26-1659 木村進 080-3381-0297
編集事務局 〒315-0014 石岡市府府 4-3-32（木村）
HP <http://www.furusato-kaze.com/>

今は酒を飲むことは全くなくなってしまったが、以前は酒好きを通り越して、酒に浸かっているような暮らしをしていたこともあった。その頃に、秋になり柿の葉が色づいてくると、摘んできてその上に白玉を載せ、梅と山葵で食べながらよく酒を飲んだ。白玉と言うと夏のもののような感じがするが、こんな風にして食べるとなかなか良い酒の肴になる。酒の肴で思い出したが、北海道に山葵と言うものがあり、この山葵をすりおろしお醤油を垂らし、焼いた餅にたつぷりとつけてノリで巻き食べると、これも実に良い酒の肴になる。餅に酒？...と思われるかもしれないが、実に良い肴だ。我が家の庭に、北海道の野生の山葵が植えてあり、毎年その辛さを褒めていたのであったが、昨年の夏に突然に枯れてしまい、今年はその味を褒める事が出来ない。鳥の水炊き等には絶対おすすめである。ああ、今年は寂しい。

悪路狼夢（オロロム）の歌 II 兼平智恵子

悪路王と称する形相恐ろしき人間頭部が、茨城県城里町高久の鹿島神社と鹿嶋市宮中の鹿島神宮にそれぞれ一体伝わっています。

この二体の悪路王につきましては、ふるさと風、前月号（第一九七号）「悪路狼夢の歌Ⅰ」にて、故白井代表の〈悪路狼夢の歌、創作メモ〉よりご案内しました。

今回は「悪路狼夢の歌Ⅱ」として

ことば座文庫

悪路狼夢の歌

二〇〇八年十月十日発行

著者 白井 啓治

発行者 小林 幸枝

発行所 ことば座出版部

版部

発売元 ことば座

より

朗読舞劇 「悪路狼夢（オロロム＝悪路王）の歌」

語り部 白井啓治

手話舞 小林幸枝

をご案内します。

語り部

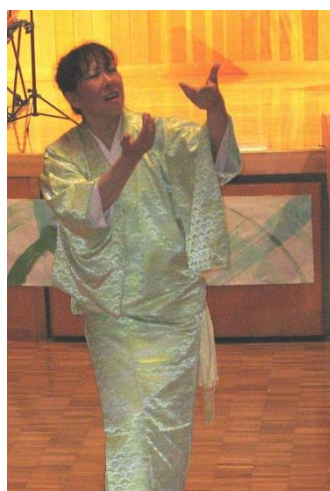
ここに登場する悪路王こと悪路狼夢は、かつて行方の湖畔に住む古代人、蝦夷を攻め滅ぼそうと侵略してきた、黒坂命、建借間命を蹴散（けち）らし、舞の民を救った奈女方比古（なめののかたのひこ）の子孫で、奈女方比古からおよそ三五〇年ほど下がった七五〇年頃に生まれた人

物である。村長の息子、悪路狼夢と心

やさしい村娘の乙音（おとね）は恋に落ち、将来を誓い合った。二人は、シカシマの天なる大神に、結びの報告をするためにシカシマの森にをかけていった。

そこには、大和の征服者達が勝手に祭った鹿島神社があったが、悪路狼夢たちの大神、シカシマ・カムイは、その豊かな杜そのものであった。

杜の大神に二人の結びを報告した後、悪路狼夢と乙音は舞の民に伝わる風の舞を奉納したのであった。



舞歌①（風の姿）

『風よあなたは

物陰に隠れて暮らす私達に

空の青と海の青と

森の緑の中に

歓びの暮らしを創ることを

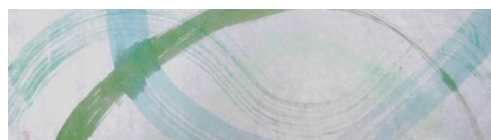
教えてくれました

風よあなたは

流れる舞の姿

だから私はあなたに

感謝を舞いにして捧げます



ひびけ心の声 とどけ心の声
私は大地の舞姫

風よあなたは

暮らしの恵みを教えてくれた

流れの舞姫』

語り部

「舞の奉納がおわると、悪路狼夢は乙音を湧水の池の端に待たせ、一人森の奥に分け入り、シカシマのカムイに対峙し、舞の民の安泰を祈願したのであった。乙音は、ひとり森の湧水に身を映しながら悪路狼夢を待っていたのであったが、蝦夷征伐に向かうため鹿島神宮に武の祭神、武甕槌命へ先勝の祈願に來た大和の飢えた荒くれどもに犯され、絶望のあまり、自ら命を絶ってしまったのであった。

つわものの奈女方比古の血と慈愛の比愛（ひめ）の血を引く、悪路狼夢の怒りは、三日三晩、鹿島が浦（霞ヶ浦）の高波となつて荒れ狂わせた。

舞歌②（怒りの涙）

『天なる神よ

シカシマのカムイよ

あなたは言った

生きる心の力が一番大切だと

そして生きる心の力を一番に

愛する者に捧げよと

神よ

我が一番に愛する者の
命の奪われた

私には生きる心の力を

捧げる人はもういない

汚された肉体を自ら屍とした

我が愛する乙音よ

我が心の力は

乙音を汚した憎き大和の

輩どもへの復讐に捧げよう

鹿島ガ浦に

三日三晩の荒ぶる高波の静まつたら

我が心の力は

乙音の恨みの心の側にあつて

野蛮なる大和の輩の心臓を貫かん

シカシマのカマイヨ

悪路狼夢に不屈の力を与えたまえ』

つづく

愛する乙音を犯した大和の兵士達への悪路狼夢
の復讐は、これからどう展開していくのでしょうか：白井啓治著『悪路狼夢の歌』来月号をお待ち
下さい。

○ お日さまにいだかれて網はおずき

智恵子



(ちえこ)

我が人生の回想10

木下明男

1960年代後半結婚へ・・・

函館で開催された交流会の目玉は、タカクラテル氏の講演。タカクラテル氏は、政治家としても作家としても著名な人物。戦後すぐに国会議員(衆議院・参議院)を努めたが、アメリカによるレツド・パージで公職追放に会い、ソ連や中国で諸々の活動を・・・特に民族芸能に詳しく、タカクラ氏の話は分かり易く、大衆活動は何に依拠して進めるか等々・・・私の人生観に大きな影響を与えた。そして、此処で開催された交流会が、生涯をかけて進める運動として、自らの生き方を決定付けた。

僅か一週間、極寒の函館の旅だったが・・・心に沁みた思いは格別だった。東京に戻り日常の生活が始まるのだが、会社では組合活動に参加・・・地域活動では、積極的に役員等も引き受け忙しい日々が始まる。そして、麻雀や遊びの日々も続いていた。家に帰るのが遅くなり、外泊も頻繁になる。やがて、家を出るのを決意、会社近くでのアパート生活が始まり、そしてそのアパートが、諸活動や遊び仲間の拠点になっていった。其々の勤め先での仕事が終わわり、僅か6畳のアパートの一室に集まる若者たち・・・公式な会議の打ち合わせに、夜な夜な集まるのだった。また、世のため人のため豊かな社会生活の実現を求めて活動をしている、健全な青年たちは当然のように異性を

を求めます。当然のように多くのカップルが生まれます、此の頃言われていたのは・・・歌って踊って恋をする青年運動？多くの若い女性が(保母さん、看護婦さん、金融関係女性行員、製薬会社の女性工員、事務員・・・)あつまり、そして多くの若者たちが生きがい求めて・・・。1960年代後半のお正月、仲間と共に同じ区内にある病院の看護婦さんがアパートに集まる。そして、その若い看護婦さん(10代)との付き合いが始まり、翌年の春に多くに仲間に祝われ(区民会館に400人が参加)結婚することに・・・。新婚住まいは一軒一間と僅かな台所半間の玄関がある、二棟続きの長屋。数年此処で暮らしたが、共働きで夜勤等もあり大変な子育てを見て、見かねた義姉が横須賀に建てた新居に同居を提案してくれた。渡りに船とばかりに、その提案を受け入れ長距離(2時間を超す)通勤が始まる。二人目の子供が生まれたが、活動の任務は増々深まり、終電に間に合わない日が続き外泊が(仲間の家に泊まる)多くなる。年間100日・・・嫁さんも月に数日の夜勤があり(仕事の責任が・・・)相当義姉にたよることが多くなった。

丁度この頃、現在社会問題になっている統一教会(勝共連合)が、街中に部屋を借りて溜り場に上京したばかりの若い女性を勧誘していた・・・？田舎から右も左もわからない、不安を抱えた若い娘が引っ掛かり、その部屋に連れ込まれていた。その部屋に誘われていくうち、やがて寮から出て共同生活を行い勧誘者と共に、よく解らないまま駅頭や街頭で署名活動や募金集めを行うようになる。労音の活動にも顔を出している若い女の

娘・・・随分と奪還した。若い娘の話をよく聞いてやり、新聞の記事を見せながら統一教会の実態を教えてやった。そんな娘たちも、芳音の仲間とともに、遠い我が住いに遊びに来たものです・・・。そこで、色々語り合いものの見方考え方、生き方等を勉強したものです。やがて、そんな若い子たちに彼氏ができ恋愛が成就したときには、結婚式に呼ばれ挨拶をしたものです。仲人や紹介人・・・主賓の挨拶等も数えきれないくらいでした。

やがて、東京に中古住宅を購入し、益々活動の中枢を担うようになっていった。30歳を超えたころには、東京芳音の副委員長に選ばれ役割は深まっていたのでした。



(まさこ)

地域に眠る埋もれた歴史(86)

木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】(12) 最終

光明寺(下妻)・終道場

下妻市小島にある親鸞が常陸国に来て最初の3年間を過ごした「小島草庵」跡を最初に紹介しました。

この場所で布教をして多くの支持者を得たようですが、書かれた物がほとんどなく詳細は不明です。小島草庵は稲田へ移った時に、この付近出身の弟子である蓮位坊に譲ったと言われています。

そしてこの草庵の場所には三月寺が建てられたといわれています。この三月寺の名前は親鸞が3年目の最後の3ヶ月間ここに籠っていたことから名づけられたようですので、草庵そのものを名付けたのかもしれませんが。



少し、近くで足跡が残っているところを探しました。そして、すぐ近くの下妻の街の中に「西木山高月院光明寺」が親鸞との関係が深いことを知りました。下妻小学校のすぐ隣にある比較的大きな寺です。

寺の入口の手前におおきな木があります。

親鸞が小島から稲田に移る時に植えたと言う菩提樹です。



(現地説明文)

市指定文化財(天然記念物)「親鸞御手植の菩提樹」推定樹齢700年以上。この樹は健保年間(1213～18)浄土真宗の開祖親鸞聖人が小島の草庵に3年間滞在し、伝道に努めていたが、稲田に去る際に念に植樹したものと伝えられ、聖人御遺跡巡拝者の間では有名な老樹である。

歌人長塚節もしばしば当地を訪れており、菩提樹を詠んだ一首が傍らの歌碑にある。

うつそみの人のためにと菩提樹を

ここに植ゑけむ人の尊とさ

平成2年3月建立 下妻市教育委員会

また、門を入ってすぐ右手に

この寺を建てた親鸞御弟子「明空」が植えたと言
う柊（ひいらぎ）の木があります。

またそこに「柊道場之碑」という石碑が建てられ
ています。



（現地説明文）

市指定文化財（天然記念物） 明空御手植の柊 推
定樹齢 700年以上。

光明寺開祖明空房は寺伝によれば 俗名三浦荒次
郎義忠といい、親鸞の弟子となり、仏道に励んだ。

明空はヒイラギを好み、境内に多く植えたので、
光明寺は「柊道場」とも呼ばれた。この老樹は当
時のものといわれている。傍に次の歌碑がある。
われもまた心に造る罪科を

名にあらわして 植うる一本 （明空）

平成二年三月 建立 下妻市教育委員会

さて何故明空は柊（ひいらぎ）が好きだったので
しょうか？

明空は元は武士だったようで三浦氏が北条氏に敗
れ、おちのびる時に親鸞の話を聞いて弟子になっ
たようです。

また、親鸞の六老僧の一人といわれています。

（寺宝「門侶交名牒」に、「明光・明空・了海・
源海・了源・源誓」とあり「已上門弟六老僧」と
記されているそうです）

柊の葉は、先が棘のようにとんがっていますが、
これが年をとると丸くなるのだそうです。

だいたい40〜50年で徐々に葉が変わっていき
2〜300年で丸い葉になるのだそうです。

人間もそうですよね。この柊から人間にもたとえ
て言われるようになったそうです。

孔子も年をとれば耳順となり、更に矩を越えなく
なりますね。

私ももうこの年になりましたので、気持ちは少し
複雑です。



このたてものによく似た建物が笠間の稲田草庵の
あった「西念寺」にありました。

そちらでは「御幽楼」と名がついていました。

こちらは良くわかりません。

書院と書かれているものもありました。

この常陸国における親鸞の足跡を巡るという企画
は真宗信者の方達の間では時々行われているよう
です。ここでは私が常陸国内の各地の杜寺仏閣な
どを巡る間に親鸞の足跡に気がつき纏めてみたも
ので、これが目的で探したものではないので全て
を網羅したものではありません。

必要なものがまだまだたくさん残されたように思
う。しかしこの書が常陸国における親鸞聖人の事
を知る一つのきっかけとなっていただければとて
も嬉しい限りです。

（常陸国における親鸞の足跡おわり）

嬉しかったいただきもの

伊東弓子

暦が残り二枚となった。今年も間もなく暮れていく。暑い日寒い日婆さんは一日も休まず、朝の散歩に行ってくれた。その優しい気持と強い心をありがたく思っている。その婆さんが今年ほど年とった・弱ったと感じたことは九年間の付き合いの中で初めてだった。俺は爺さんが亡くなって、一人暮らしの婆さんの所へ来て九年、孫や兄ちゃんと共に暮らし始め間もなく一昔、十年になる、雄犬の「いづみ」だ。「お前は元氣だね」と、婆さんはよく言うが、人間の十年よりもっと変化は起きていると思う。

初夏の暑さはひどく、梅雨時の雨もしみじみ味あわないで過ぎたようだ。暑くなった矢先、婆さんが突然いなくなった。俺には何もいわないし、朝の散歩も行けないまま、兄ちゃんも何も話してくれないし、悶々とした日が続いた。その中、特別変わった様子もなく、婆さんは元氣で帰ってきた。まずは一安心した。外見からは特別な様子の変化もなく表情もよく、いつもの様な声かけをしてくれた。留守の間の話しもしてくれたが、元氣な様子に安心して、明日からの朝の散歩を期待した。

毎日、喰っちゃ寝、喰っちゃ寝、していたから体に力がないとか、筋肉がよくよくなかったとかで、散歩は「小さな散歩だよ」と、ごくごく近くの畑道を一回りするだけだった。そして昼間は食後、ひと休み、ひと眠りしていた。静かだ。それでも夕食の仕度時間にはせつせと動いていた。

一週間後には活気が戻った感じで、散歩も少し長くなり、俺の気分もよくなっていった。ところが食後のひと休み、ひと眠りが続いていく中に、家事や会の活動のこと、やる気が薄れて一向に進まないだろうし。こんな自分が厭だねと言いだした。体を動かすことがいやなようだ。気持ちがいけないそう。俺だつてどうしてやったらいいかわかんない。頑張つてよ、とありきたりのことしかいえない。

元氣がおきない原因はもう一つあるらしい。二日に一回くらい寄ってくれたY婆ちゃんも車に乗るのは止めたらしく殆んど来なくなった。俺に時々届けてくれていた骨も届かなくなった。今迄、なんやかやと一緒にやってきたし、家の婆ちゃんが力以上の欲張りの根性でしている仕事をしつこい程の便宜を図ってやってくれていた。家の婆さんも甘えすぎないように氣を使つてはいるようだが、有難いことばかりで甘えてきたわけだ。そういう相手とお茶飲むことも喋ったりすることも出来なくなった。偶に出かけて行くようだが、人は会うことが少なくなると、なんかよそよそしくなるのかね。話しを交わさないとだめだね。隔たりが出来てくるのかね。溝が出来たように淋しいね。動きの取れなくなった二人をもやが包んでいるようだ。早く晴れていくといいなあ。そのせいか俺の所にお茶や菓子を持つてきて一緒に八つにすることが多くなった。

ところが相当の決心をするような出来事があった。近所で亡くなった人の“顔出し”のお悔やみの帰り、常会の人との話しの中で、年齢についてHさんは七十代、Kさんは六十代、若いSさんは二十代、「いづみの婆ちゃんはいくつ?」と、若い

Sさんに聞かれた。いつも作業など一緒にしてきたが、しみじみした話しは抜けていたと思いがら「ああ、八十二才よ」と言ったが、家についてつくづく考えた。あーウ大きな年齢になったんだと思うと急に悲しくなったらしく涙をこぼしていた。婆さんの涙は見たことがなかったから驚いたが、あはれにも見えて声もかけられなかった。次の日から部屋の中の作業がすんだのか、土手の草刈りをしたり、明日出す塵の始末をしたりして動いていた。何か思うところがあつたのだろう。

暑さが去っていく中で、ずい分と氣分的に楽になったのだろう。以前と変わらないように動き出した。「無理するなよ」と、声をかけてみたが通じたかな。

バスの本数も少ないし、もう少し自転車利用をしてみたいと言いついて、兄ちゃんにタイヤ、電氣、籠を直してもらっている。舗道の所を走る、舗道がなくて交通量の激しい所は回り道をしたり、堤防を行くなどと言っている。明るい時間に帰ってくる。範囲は小川町、高浜町、南台附近、村内と決心したことを兄ちゃんと話しているが、ちゃんと守れるだろうか。陽がだんだん短くなるし、婆さんの性格が「どうかな」と、不信いだく俺だ。やつぱり何度か暗くなってから帰宅があつた。ある夕方、外出から帰つてきて上がり口で大喜びの声を出していた。昼間、誰が来たかは知っている俺だが、「わあ、誰かしら」野菜と一緒にあつたしぶ皮煮の甘栗に大喜びをしていた。後でわかったことだったが、恋人からの贈り物のように思われる程喜んでた。次の日、お茶と甘栗一粒を大

切そうに食べていた。「ここ二日位に会う人にもあげよう」。そして最後の一粒をだいじそうに食べていた。余程嬉しかったのだろう。それから一週間、夕食をつくりながら唄っていた歌は、青春時代のまだ恋人とよぶ人の現れない歌だと言っている。楽しそうだ。ここちよく聞こえてくる。

一、なでしこ紅し 河原道

雨に悲しき 草のいろ

何をまねくか 花すすき

よべばとて若き日は 早すぎぬ

ああ 秋草の花の いとおしさ

(秋草のうた)

一、清き月に 石山寺に

筆のあとも ゆかしや

もの思い 衣をかさぬ

光源氏 ものがたり

(?)

一、まぶたとじれば 現し世の

人の心の空しさに

夢から夢へ??????

豊かに御座す 観世音

(夢 殿)

題名を忘れたものもあるし、歌詞を忘れたところもある。遠い遠い日のうただ。

毎夕食の準備をしている一週間くらい、唄い続けていた。余程心安らかな日々だったようだ。

その後、よまい言することもなく、悟りきったわけでもあるまいが、生活姿勢がとてもよい感じ

がする。俺だつて気持がよい。先は短い、考え方で長い、元気でいこう。

朝露を踏んで歩く枯草の道、今日一人と一匹で行く「いづみ! 枯草の中に野菊がかわいい」と、喜びの声。婆さん元気でいこう。



(よしこ)

多良崎城跡

小林幸枝

多良崎(たらざき)城跡は、ひたちなか市足崎(たらざき)にある中世の城跡です。場所は旧勝田市の佐和駅の東側(勝田ゴルフ倶楽部の西側)にあり、比較的大きな城跡で、城の大きさはこの地域では一番大きく、旧勝田市の史跡第一号として登録されたそうです。

地名は足崎(たらざき)と書き、城の名称は「多良崎(たらざき)城」となっているので少し調べてみました。

歴史としては常陸大掾吉田氏の一族で吉田広幹(ひろもと)の三男の吉田里幹(さともと)がこの地に

城を築いて多良崎氏を名乗ったのが始まりだといいます。この吉田氏は石岡(常陸府中)に居した常陸大掾氏と同じ一族で、つくば市北条の多気山に居した常陸大掾多気繁幹の次男清幹(きよもと)が茨城郡吉田郷に移って吉田氏を称し、

吉田(大掾) 清幹―盛幹(もりもと)―幹清(もときよ)―広幹(ひろもと)と続いています。

この地域から東石川にかけては、この吉田広幹の氏族が鎌倉時代から勢力を広げています。

また、鎌倉時代は「足崎」とは言わず、「多良崎郷」と呼ばれていたようです。

1426年に吉田氏が水戸城を江戸氏に奪われ、この多良崎城も江戸通重(みちしげ)の次男が土着し、明日崎氏と称したといわれています。

しかしこの江戸氏も戦国末期の天正18年(1590年)に豊臣秀吉による佐竹氏による常陸統一の流れで、佐竹氏に水戸城を追われ、ここ多良崎城も佐竹軍によりわずか一日で落城してしまったようです。

最近、茨城県の心霊スポットとしても大変人気があるみたいです。ネットで検索してみると、幽霊を目撃したというような記事が沢山ありました。

佐竹氏による戦国終結の話など、大掾吉田氏や江戸氏たちが今でも亡霊となって現われるのかもしれないね?

もっともこのようなネットの話しが、デマか真実は私には分かりません。

興味のある方は、度胸試しに一度出かけてみてくださいね。

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「心理戦」

暑い毎日が落ち着いたと思ったら、一気に冬の到来ですね。

私も季節の変わり目に風邪を引いてしまい、今も引きずっています。

今年の風邪は喉にきますね、中々咳や鼻詰まりが解消されず、熱は無いのに体の節々が痛むと言った所に悩まされています。

皆さんも体調管理には十分注意くださいね。

なによりも、病気になる気が付きます、健康でいる事の素晴らしさが。

今回は、前回からの続きです。

ある日その男は、黒上司から仕事後の飲みに誘われました。

断る理由もありませんでしたし、どんな話が聞けるのか、少しワクワクした気持ちもちつつ、水面下でのお互いの腹の探り合いもこの時はお互い楽しんでいる様でした。

黒上司は、土地の地主だった事もあり、懐具合で言うくと裕福な部類に入ります。

これは、今後幾度となく飲みに行く過程で、何故か過去の税金の支払い書等を見せられた結果、その様な答えへと繋がるわけですが・・

と言う事で、毎度ほぼ奢ってもらいながら、様々な話をする事となります。

黒上司「このメンバーをどう見る？どう分析する？」

男「皆さん1人1人、従順と言うべきなのか、考える事をやめているのか、何を思っているのか、良くわかりません。」

黒上司「何も考えて無いんだよ、ただ言われた事にミスなく従事する様に洗脳してるんだから。」

男「やっぱりそうですよ、おかしいと思ったんですよ。」

黒上司「あいつらは馬鹿なんだから、自ら何か出来るようなそんな器は持って無いんだよ、飴と鞭を上手く使って、自分の理想的な組織運営をあいづらに実現させるんだよ。それが一番簡単なんだから。」

男「それじゃあ人は育たないじゃないですか？」

黒上司「育てたってたかが知れてるんだから、育てるべき人間が入ってきた時にそうすれば良いんだよ、だからこうやってお前を誘って育て様としてるだろう？」

男「私は今育てられているんですか？」

黒「そりやそうだろう、洗脳の件も含めて色々話してるんだから、腹を割って話してるって事は、組織運営のやり方を伝授してる様なもんだろう。」

男「何となく言ってる意味は分かりますが、洗脳して言いなりにしながら仕事をさせるのが良い事だとは思えません。」

黒「じゃあお前ならどうするんだ？」

男「1人ずつ良く観察して、個性をいかせるように指導・教育していきます。」

黒「そのやり方で、どのぐらいの時間が掛かると予想してるんだ？」

男「それぞれのレベルというか、現状を把握しないとなんとも言えませんが、優秀だと思える人なら3ヶ月、難しいと感じる場合は、少なくとも3年或いは言った所だと思えます。」

黒「まあそうなるだろうな、優秀と思える奴が何人居ると思う？」

男「パット見た感覚で約3分の1から4分の1といった所でしょうか。」

黒「教育の進め方は、どう考える？」

男「個人毎に面談を実施し、現状と今後について確認します。」

黒「じゃあ好きな様にやってみて」

この様な会話の他に、言葉巧みに私を取り込んで操ろうと、躍起になっていました。

この様な飲み会が日を追う毎に増えていき、多い時では2日に1回のペースとなっています。

この頃から、黒上司は私自身を朝礼等で褒め称え、黒「皆も男を見習って行動する様に」等々、他とは一線を画していました。

ただ、黒上司からすればあの手この手で男を取り込もうしていたにも関わらず、中々自分の思う様に行かない事を、知らず知らずのうちに溜まったストレスとして、今まで以上にその他の人間に対してキツく当たる様になって行くのです。

これに対して男もすぐ反応する事が出来なかった(度重なる飲み会に疲弊していた)為、被害者達

の心傷もあつと言う間に限界近くまで、膨れ上がっていくのでした。

ある夜、「もう辞めたい」と申し出てくる者がいました。

男「どうした急に何があった？」

他1「もう、侮辱されるのはウンザリです！、皆んなの為にも自分が犠牲になって、今の現状を知らしめてやりますよ」

と盛り上がって来ましたが、今月はここまでとします。それではまた次月に。



(ちえこ)

茨城県の難読地名とその由来(28)

木村 進

常陸国風土記と地名(4)

(七) 香島(かしま)

香島郡については、常陸国風土記の記述だけが

「香島」であり、他の書物などでは「鹿島」が使われています。香島郡の成立については、風土記に「大化五年(649年)に、下総の海上国(うなかみのくに)の軽野(かるの)より南の一里と、那賀国の寒田(さむた)より北の五里とを合併し、新たに神の郡を置いた。」と書かれています。香島の名前の由来は「香島の天の大神」とあるだけで、特に書かれてはいません。

・**軽野**…現在の神栖市軽野あたり

・**寒田**…この場所は特定されていないが、香島郡ができる前は那賀の国の南端であるので、軽野の少し北側であろう。どこまでが香島郡になったのかというと、昔は涸沼がもつと大きな内海であったからこのあたりまでだと考えて良いでしょう。この内海は「阿多可奈湖(あたかなのみなど)」と呼ばれていたようで、この沼を寒田と呼んでいたのかもしれませんが。

・**香島の天の大神**…

高天原より天降って来た大神の名を「香島の天の大神」という。(中略)神の宮を造らせ、式年に改修されている。毎年七月に、舟を造って、津の宮に奉納している。

社の南に郡家があり、反対側の北側には沼尾の池がある。この沼で採れる蓮根は、他では味わえない良い味である。病気の者も、この沼の蓮を食うと、たちどころに癒えるという。鮒や鯉も多い。

ここは以前郡家のあった所で、橋も多く、良い実がなる。

・・・現在「鹿島神宮本宮・沼尾神社と坂戸神社」の三社をもって「香島天大神」と称しています。

・**高松の浜**…

郡家の東二、三里のところに高松の浜がある。むかし東の大海から流れる砂や貝が積もって、小高い丘ができた。やがて松の林が繁り、椎や柴も入り混じって、今ではもうすっかり山野のようである。…現在の鹿嶋市平井付近か、高松緑地公園がある。

・**若松の浜**…

ここ(高松の浜)から南の軽野の里の若松の浜までの三十里あまり一帯に、松の山がつづき、マツホド、ネアルマツホドなどの薬草も毎年採れる。この若松の浦は、常陸と下総の国堺の安是の湊(現、利根川河口付近)の近くである。剣を作るのに砂鉄を使うのはよいが、香島の神山なので、みだりに入りこんで松を伐ったり砂を掘ったりすることはできない。

・・・この若松の浜は常陸国の南端で、下総国に近い鹿島神宮領域であり、鹿島灘の南部(日川付近)と思われます。ここで砂鉄による剣づくりが行われていたことは大変重要です。

・**童子女(うない)の松原**…

常陸国風土記には鹿島郡は2つの国から少し土地を分けてもらって香島の大神の国を作ったとあり、この2つ(軽野と寒田)の場所にいた男女の恋の話が載せられている。2つの国の少年・少女(「いらつ」と「いらつめ」)が歌垣に集い、

恋におち朝が来るのも忘れて松林の陰で語り明かした。気が付いたら朝になり2人は恥ずかしくなつて、「奈美松」と「古津松」という松の木となつてしまった。古津松神、古津松神となり、現在の手子后(てごさき)神社などに祀られています。また童子女は神に仕える男女ということで髪の毛を後ろに束ねて縛った形「うない」と読むようですが、神栖市の「童子女の松原公園」は「おとめ」と読ませています。

白鳥の里… 郡家の北三十里のところに、白鳥の里がある。昔、天より飛び来たった白鳥があつた。朝に舞ひ降りて来て、乙女の姿となり、小石を拾ひ集めて、池の堤を少しずつ築き、夕べにはふたたび昇り帰って行くのだが、少し築いてはすぐ崩れて、いたづらに月日はかさむばかりだった。そして天に舞ひ昇り、ふたたび舞ひ降りてくることはなかった。このいはれにより、白鳥の郷と名付けられた。…現在の銚田市市居の白鳥山大光寺照明院や、銚田市札の普門寺あたり

・角折の浜… 以下の2つの伝承が書かれている。
(1) 大きな蛇がいて、東の海に出ようと浜に穴を掘った時に、蛇の角が折れてしまったため。

(2) 倭武の天皇(ヤマトタケル)がこの浜辺に宿ったとき、御饌を供へるに水がなかった。そこで鹿の角で地を掘ってみたら、角は折れてしまったため。

さて、角のある蛇がいるかどうかはよくわからないが、行方郡のところでも「夜刀の神」のことが

書かれており、これには蛇で角があるとされています。もともとこれは逸話として書かれたようであり、現地人のことかもしれません。

(八) 那賀(なか)

那賀(なか) 郡の那賀についての由来は書かれたものは見つかっていません。

・平津の駅家(ひらつのうまや)… 古代の官道駅家があつた場所で現在の水戸市平戸町あたり

・大櫛(おおぐし)の岡…

平津の駅家の西一、二里のところに、大櫛といふ名の岡がある。昔、大男がいて、岡の上に立つたまま手をのばして海辺の砂浜の大蛤をほじって食べた。その貝殻が積もつて岡となつた。大きくくじつたことから、大櫛の岡の名がついた。大男の足跡は、長さ四十歩以上、幅二十歩以上で、小便の跡の穴は、直径二十歩以上ある。

…大男のダイダラボッチ伝説である。現在国道51号線近くに「大串貝塚ふれあい公園」があり、ダイダラボッチ大男の巨大なミニメントがある。

・晡時臥(くれふし)山…

茨城の里は、北に高い丘があり、晡時臥の山という。

…水戸市木葉下町(あぼつけちよう)にある朝房山(あさぼうやま)とみられている

この後に次の話のついている。「この里に、昔、努賀毗古(ヌカヒコ)・努賀毗咩(ヌカヒメ)

といふ兄妹がいた。ある夜、ヌカヒメが寢床にいと、名も知らぬ男がいて求婚し、朝帰つていった。一晩で夫婦となり、やがて子ができたが、生まれた子は小さな蛇だった。蛇の子は、昼は押し黙つたままで、夜になるとヌカヒメに語りかけた。ヌカヒメと兄は、神の子ではないかと驚き、清めた杯に蛇を寝かせて、土の祭壇の上に安置した。ところが、次の夜には、杯からはみ出すほどの大きになつていった。そこで、もっと大きな平瓮に移しかえたが、次の夜には更に大きくなつていった。こんなことを何度も繰り返しているうちに、家にあるどの器も合わなくなつてしまった。ヌカヒメは、「あなたの不思議な力を見ていると神の子なのだということがよくわかります。わたしたちの力では育てきれません。どうか父の神のところにお行きなさい。」と蛇の子にいうと、蛇の子は悲しんで泣いて、涙を拭いながら「おっしゃるとおりです。お言葉にしたがいます。けれど一人で旅をするのはかなわぬことです。できればもう一人の子どもとともに行かせてください。」といった。ヌカヒメが「わたしの家には、わたしと兄しかいません。見ればわかるでしょう。あいにく誰も一緒には行けません。」という。蛇の子はうらめしそうに口をつぐんだ。別れのときになつて、蛇の子は怒りを押さえきれず、雷の姿になつて、伯父のヌカヒコを殺し、そのまま天に昇らうとしたが、これに驚き怒つた母が、平瓮を投げ当たると、平瓮の呪力で蛇は昇ることができず、そ

のまぐれふしの山の峯にとどまることになった。蛇の子が眠った器は、今も片岡の村にある。兄妹の子孫は、社を立てて蛇を祭ったので、家が絶えてしまふことはなかった。」

・粟川、河内…

郡家より東北の粟川の兩岸に、駅家が置かれた。

駅家の周りを河がめぐっていたので、「河内の駅家」の名がついた。

粟川 … 現那珂川

河内の駅家 … 現水戸市上河内町（かみがちちよう）、中河内町（なががちちよう）あたり

・曝井（さらしい）…

駅家の南の坂の途中に泉があり、清い水がたくさん出る。曝井（さらしい）といい、付近の村の女は、夏の月に集まって、布を洗って、日に曝して乾す。… 現水戸市愛宕町の「萬葉曝井の森」という公園あたり

（注）風土記に登場する地名の現在地は明らかになっていないところも多く、推定地です。



（よしこ）

【風の談話室】 《読者投稿》

やよいと暮らして（69）

さと女

春夏秋冬二升五合・・・“あきないますますはんじよう！”異常に暑かった夏、10月に入りヤット爽やかな秋が思っていたら、いきなり冬が来た???世の中本当に狂っているのが?（経済も政治も世界も、そして気候も・・・地球が壊れてしまったか?）今年には本当に秋が楽しめないのかな????

・久しぶりにカラリとした青空・・・9月も今日で終わり。カレンダーも残すところ後3枚となる。あの暑かった夏が懐かしく思われる。庭に出るとそこいら中キンモクセイの香りに包まれ、栗はいよいよ終わりの季節に入ったようだ。我が家の生垣は15本のキンモクセイに囲まれている・・・今、香りの最盛期かな?あと少し香りが楽しめよう。

・俵型の渋柿は今年も沢山実っている・・・戦前から有るかなりの老木。戦争中疎開していた、空きつ腹の子供たちが、熟して甘くなった柿を競って食べたそうです。昨年も此の老木から、つるし柿（干し柿）に柿酢、柿渋、など沢山作った。柿酢は思いの他美味しくて、柿渋は数年置いてから使う用なので楽しみです。つるし柿（干し柿）は冷たい風が吹き、霜が降り始める頃・・・儼が生えずいい出来になるのだが、今年のはどうなるかな。

・朝から雨模様、急激に気温が下がってきた。今日は週1のクラフトの日・・・寒雨にも負けず、年寄の皆さんが集まった。思えばオリブさんにお世話になって5年目に・・・ランチを頂き、その後思い思いの籠編み、教え合ってみんなが先生です。3時になると美味しいコーヒーとケーキが出て、おしゃべりも弾みそして解散です。ママさん今日も1日ありがとうございました。

・至福の一時です。籠も、買い物バッグやらお洒落バッグやら小物入れやらさまざま・・・先輩方からはお料理なども教えて貰う。それもこれも場所あつての事、ありがたい事・・・皆さん元気で顔を出して下さり、元気に帰られる。嬉しいですね。今後もよろしくお願いします。

・天気が悪く庭仕事が出来ないので、朝から古い段ボールの始末を・・・すると、色の褪せた古い写真が出てきた?その中に1975年と書かれたなつかしい写真が・・・幼年期の次男がポニー?に乗っている写真、記憶をたどると、実家にきた折2度ほど楽しんだ牧場・・・?其処から少し上がつて行くと、今はなくなってしまった「国民宿舎つくばね荘」があり、川沿いには釣り堀が・・・釣り上げたマス（イワナ?）を塩焼きにしてくれた。記憶を辿ってみると、其処は万葉の森近くで?確か牧場があったような気がする。次々出てくる写真に見入り、片付けはちっとも進まない・・・。思い出の世界にどっぷり浸かり、気づけば辺りは薄暗くなっていた。整理はもう無理・・・また段ボールに写真は戻ってしまう。思い切らないと!

・稲刈りが終わった筈の田んぼに、また青々と短めの稲穂が、近寄って見ると刈り取られた株から二番穂・稲の蘗が・・・五穀豊穰を願って縁起物の稲穂飾りを作って見た、程好い出来栄に思わずニンマリ・・・。

・ドキュメント？映画「石岡タロー」の完成披露試写会に行ってきた。今から40年以上前、17年間も石岡駅（鹿島鉄道）に、飼い主を求め通い続けた保護犬（石岡東小学校で保護）のタロー。昭和の雰囲気満載の中・・・タローと小学校の子供たちや人々とのふれあい。涙が止まりませんでした・・・早く一般公開されますようお願いします。

・寒波襲来の中（神無月の24日25日）、紅葉と温泉を楽しんで来た。北関東道、東北道と高速を乗り継ぎ那須まで・・・賑やかな行楽地那須街道を通り過ぎ、茶臼岳のロープウェイ駅まで一気に車を走らす。紅葉真っ盛りの付近では雪がちらつきだした、時期が遅く食事できる店は全てクローズ。止むを得ず福島県の秘境甲子温泉まで・・・宿泊予定の大黒屋で遅めの昼食をとる。100段もの階段を降りた所にある大岩風呂・・・。此処から眺めた紅葉は最高です。2日目は更に車を走らせ奇岩の「塔のへつり」へ、不思議形が連なる（仏塔）岩周辺の散策・・・。最後の観光は大内宿、名物食事（けんちんそば）や雑貨など楽しみながらゆっくり見学。今回の旅行は、「まんまや」を中心としたじっちゃん、ばっちゃんの旅で・・・。楽しい思い出いっぱい旅でした。



（ちえこ）

石岡地方のよもやま話

木村 進

（19）石岡タローの話

先日の10月23日に「石岡タロー」と題した映画の完成試写会がひまわり館にて行われました。これは東京オリンピックのあった、1964年（昭和39年）から亡くなるまでの17年間、石岡市立東小学校から約2km離れた石岡駅まで毎日決った時間（学校のチャイムが鳴る時間2回）に通い続けた犬の物語（実話）です。

タローは駅にやって来ると暫くの間、人の行き来を見て、また去っていききました。当時はこの犬が何しに駅に現れるのかはわかりませんでした。

この理由がわかったのはタローの死後28年も経ってからでした。小学校に迷い込んだ犬の事を書いた新聞の記事を見て、元の飼い主が名乗り出た事から、駅に通い続けた理由が明るみに出たのです。

当時鹿島鉄道が石岡駅から銚田駅まで走っていました。その中間の玉造駅から石岡の幼稚園（善隣幼稚園）に通っていた当時5歳の園児がいました。その園児の飼い犬の「コロ」がこの「タロー」と呼ばれた犬でした。ある日、この子が幼稚園に行くときに、一緒に電車で石岡まできてしまいました。そして飼い主とはぐれてしまい、その後、犬は石岡東小へ迷い込みました。飼い主も卒園してからこちらの方に来る機会が少なくなり、探したのですがわからなくなってしまっていたといいます。

そしてそれから十七年間、この学校の子供たちに可愛がられ、学校の用務員さんに育てられました。そしてその後、この犬の姿は石岡周辺の人々の目にたびたび触れるようになりました。そして、それがいつしか噂となり、犬の死後大分経って、2009年に載った新聞記事がきっかけで、元の飼い主が見つかり、渋谷の忠犬ハチ公に似た話だと知られるようになりました。

2010年には当時園児が通っていた善隣幼稚園では、坂本九さんの長女の大島花子さんが作詞作曲された「ここで君を待ってるよ」という歌が作られました。そして、11月3日の文化の日（当日はスッキリした秋晴れでした）に当時の市民会館で行われた「第41回市民合唱祭」で、この幼稚園児たちがこの歌を披露しました。



私も聞きに行きましたが、幼稚園の子供達が生懸命に歌う、その白いエプロン姿がとても印象に残っています。

その後「タロー」が飼われていた市立東小学校へ行ってみました。石岡東小は旧ジャスコの6号国道をはさんで反対側にあります。通りは車が多くうるさいようですが、学校の周りは住宅街で静かな場所です。ここから駅までは、学校を出るとすぐに6号国道を跨ぐ歩道橋があります。この歩道橋をいつも渡っていたといいます。駅までの距離を測ってみました約2.5kmと結構遠いです。また、飼い主の少女が通っていた幼稚園は駅の近くの市街にあり、学校とは反対側です。



私が訪れたときは、石岡東小の校舎は新校舎に立て替え中でした。ただ、小学校の入口には卒業生の制作したものとと思われる写真のような犬のオブジェが迎えてくれました。

2012年1月に当時善隣幼稚園の園長さんだった前市長の今泉さんが、この犬の話を本「あした会えるさ」として出版（茨城新聞社）されました。

また、この話はNHKでも放映され、志村けん「天才！志村動物園」でも放送されました。タローが石岡駅に通り続いていたのは昭和39年から十七年間ですから、今から見ると石岡も

っと活気があった街だったようです。
この本に出てくるその頃の町の様子は、みんな温かな心をもって暮らしていたようです。こんな町に住みたいときと思う人が大勢いるのではないかと思います。この石岡も駅前が発達していて、人々がたくさん歩いていました。今の10倍もいたそうです。



2017年4月15日（土曜日）にリニールされた石岡駅西口前の広場でみんなのタロー像の除幕式がありました。

除幕式にはタローを偲ぶ大勢の方々が出席されNHKのニュースでも放送されました。

みんながタローのことを大切に思っていて物語を風化させなかったことが、タローと飼い主の奇跡的な再会（実際は犬が死んだ後ですが）は、人と動物の絆の物語として、さらに大勢の方に知られるようになりました。

今回この話が映画化され、コロナ禍で撮影も延びてしまったようですが、地元の皆さんが多くエキストラで出演されています。全国公開はまだですが、きっと今後全国の多くの人々に知られていくと思います。

下士官の手記

燕石（えんせき）

（先月号からの続き）

大陸での日々 12 慰安所

×月×日

掘立小屋の隣には立派な日本家屋が建っている。部下から聞いたところでは、大阪に金持ちの主人がいて、女の一人に此处を任せているらしいということだ。時折海を渡ってやってきては金を持って帰っていくのだという。軍の許可は取ってあるという。

どうせ金を渡して話を付けたのだろう。

戦闘が激化して、暫く来ていないという。

「これらの女たちの多くは、二度と祖国の土を踏むことはなかった。また、慰安婦として満州や朝鮮や台湾の貧しい村々から女たちが、言葉巧みに騙されて連れてこられていた。中には無理やり連れてこられたものも少なくはない。この者たちはもっぱら下っ端の兵隊用であった。どこの軍隊でもこうしたことは行われていたが、日本軍は殊にひどかった。「衛生管理」と称して軍医が性病検査にあたった。これら慰安所はすべて、主計、経理の管轄下にあった。当然、軍の管理下にある。植民地の住民などは、二等国民として扱った。親たちがこんな風だから、子供の間にも劣等国民と考えるものが多い。

やがて敗戦となり、これら植民地にいたものは、命からがら逃避行する羽目となった。頼みの軍隊は、高級将校を先頭に、一般人を置き去りにさっさと逃げてしまった。ましてや慰安婦を助けようなどというものは一人もいなかった。」

た。

×月×日

来る日も来る日も慌ただしい任務に追われる日々だった。此処の通信隊は、人員が200人をはるかに超えてしまった。分隊を5個作った。さらに、陸軍から、通信の新兵の教育兵を20人ばかり押し付けられた。

内地から明日には、少年通信兵が30人配属になる。内地の本隊に無線で抗議した。どうせくれるなら、ベテランをと。

「実戦で鍛えるのが一番だ。ベテランは近々大規模作戦があるのでそちらに回すしかない。出来るだけ援助するからそっちで面倒見てくれ。」と言ってプツリと切れた。

隣の陸軍師団も、更に奥地の侵攻作戦の為、大半が出動して、1個中隊ぐらいの兵力の留守部隊だけである。

相談に行っても却ってこちらの戦力を頼みにされる始末。

実際、兵員は、歩兵1個中隊を上回る。銃器も、重機関銃、擲弾筒。迫撃砲。無線機輸送用の、トラック数台。軍馬が20頭。歩兵大隊半分程の実力がある。この辺りは元々、匪賊が支配していたが、大頭目は一応親日という事になっている。が、幾つも有る中小の匪賊は、金で幾らでも寝返る。現にこちらか何度も襲われ、小さな分掌の幾つかは、全滅している。そんな中、1個中隊半の兵力は、この辺りでは一番だ。

×月×日

始めに来た少年兵は、今や立派な小隊となって、

俺が指揮し無くとも、小規模の匪賊など蹴散らしてしまう。今やここ、D鎮がこころで一番安全なところとなっている。日本の居留民も続々と集まってくる。中隊扱いという事で、立派な兵舎を独占している。

いつまでも金や物資が続くわけがない。黄さんとも相談して商売を始めることにした。商売などやったこともないから、姑娘愛々を頼ることにした。

このあたりでできる麦を買い付け、戦渦に巻き込まれていない大都市へ送る。いつかの山の村では、炭を焼かせ此れも運ぶ。幾つかの大小の河川・湖で採れる川魚も、干物にして運ぶ。代わりに、工業製品を仕入れてくる。余った儲けは隠しておく。

×月×日

こころで、付近の匪賊を、徹底的に叩いておかなければ、いつ寝首をかかれるかわからない。

制裁を加えるのは、残酷なようだが、頭目たち少数の者は、村の者たちから、とれるだけのものを搾り取っている。体も奪い、娘も奪い、好き放題だ。こいつらが制裁を受けるのはいわば自業自得だ。部下の者たちにもこの点を訓辞して、同意を取り付けてある。

黄軍属が、おりにふれて古い昔からのこの国の、歴史を教えてくれた。

負けたC屯の者らも大勢連れてこられた。敗れた者たちは、否応なく奴隷の扱いをされる。女たちは、奴婢以下の性奴隷だ。

B頭目と相談して、C屯の者たちと参をはじめ幾人かのものを貰うことにした。

意外に少ない分け前の申し出に、意外だ、という顔をしている。

A 屯の老いた長老など何の使い道もない。C 屯の C 頭目も老いている。財物も、少しだけしか貰わなかった。

「大人は欲がないな。」という。

「貸しにしたい、もしも、日本軍が負けたら、そのときは助けてくれよ。」

「あつははは。大人は、面白い。冗談がうまい。」すっかり上機嫌である。

A 屯に来る途中に、廃村があつた。C 頭目以下を其処に住ませた。とりあえず、井戸もあるし近くには川も流れている。荒れた畑も何とかなるだろう。みんな感謝している。それはそうだろう、あのままなら、ほとんど命がない。

あるいは着のみのままに荒れ地に放り出される。少しの武器も置いていくことにした。部下のほとんどを本隊に帰す。この場所は、A 鎮と言ったが、戦乱で無人となっていた。三つの屯とほぼ等距離にある。いざというときはここを拠点にするつもりである。

日本軍などは、これっばかりも頼りにしない。

×月×日

周りを調べたりして何日かたつてしまった。C 頭目についてきた者達が、せつせと綺麗にしたので、見違えるようになった。本隊から、こっそり物資を運ばせる。一人であれこれやったのですっかり疲れてしまった。C 頭目は、すっかり気落ちして、只の老いばれになってしまった。ここは、あの長老に任せる事にした。C 頭目の後室の者たちは、初めのうちは A 屯の者に聞いたのだろう、すっか

り怯えていたが、何もしないと分かれると少し安心したようだ。一人幼い女の子がいたので、暇があると遊んでやった。幼いので怖くないのだろう。折り紙を教えてやると、喜んで、毎日来ては纏わりつくのだった。母親たちは心配げである。俺もこれだけ恐れられているのかと思った。

×月×日

娘と遊んでいると、母親が入ってきた。

「心配するなよ。こんな子供に手なぞ出すものか。B 屯にも、A 鎮にも沢山女がいる。親だから心配なのだな。」

「・・・」

「一緒にお茶でも飲もう。」

テーブルにお茶と菓子を用意させる。三人で菓子をつまんだり、茶を飲んだりする。ようやく警戒心も薄れた様だ。日本でのお茶の飲み方はこうだと教える。日本の事をいろいろ聞きたがる。長老が気を利かして、酒と肴を運ばせる。

「付き合ってくれ。」

二、三杯飲む。いつの間にか夕暮れだ。娘は居眠りしている。夕食が運ばれてくる。この二日ばかり前に、姑娘が来てご馳走を置いていった。それを料理したのだろう。久しぶりの料理に、帰ろうかどうか躊躇している。

「娘と一緒に泊まって行けよ。」

意味するところは一つだ。C 頭目はもうなんの力もない。A 屯の長老も、老人だし然も、女には興味がない。参はまだ少年だ。ここへ入ってきた時から半ばそうなると思っていた。いや期待していた

娘のことは表向きの口実だった。C 頭目には、正室をはじめ、家婢をいれれば何十人も女が仕え

ていた。

女はほんの一、二度、御手付きになって、その後はぱったり訪れが途絶えた。一つには正室が異常に嫉妬深かったこともある。

子供を一人生んだことで、たちまち用済みとされたのである。もしも気に入られれば、この前来た姑娘のように、大事にされるだろう。自分にはとてもあの姑娘のような才覚はない。

あとは採る方法の一つだ。ざっとこんなことなんじゃないだろうか。

途中から、どんどん杯を重ねている。娘を長椅子に寝かせ、自分の上着をかける。

大陸での日々 14 逆襲(その1)

×月×日

頬を乱暴にたたかれた。辺りは真つ暗闇である。足につけられた鎖がない。柔らかな布団の上に寝ているみたいだ。長いこと目を塞がれていたのに、灯りに目を馴らすため明かりをつけていない。この前の村で、部下に襲われた親子が、助け出してくれたのだ。

(この前後のことも、後からの記憶と、廻りの者に聞いたことだ。)

助けてもらったのを恩義に感じたのだという。どこかで噂を聞きつけたらしい、姑娘・愛々と連絡をつけて、なんとか牢屋から助け出してくれたのだ。この動きには黄先生も勿論加わっている。黄先生が、救出計画を立てた。ここは、王屯からさほど離れていない深い山の中だ。

このへんは、狼が多くいて、王屯の者も、恐れてここまでは入ってこないそうだ。更には虎も出

没する。熊もいる。猟師でもなければ入っては来ない。

わたしは、脱出の途中で、死んだことにしてあるという。さすが黄先生はどこまでも抜け目がない。搜索ももう行われてはいないという。ここですばらく養生することにした。

×月×日

ようやく、体力も回復した。あの親子が交代で看病してくれた。息子も二人来ている。時々姑娘が来て、王屯の様子などを教えてくれる。部下たちは無事らしい。護衛の中隊と共に、王屯に留まっている。自分は、突然行方不明になったということにされている。申し訳ばかりの搜索隊を出しているが、周囲の深い山の中までは踏み込んでこない。王棟梁たちも探しているらしい。

×月×日。

姑娘を通して、分隊の者と連絡を付けた。B頭目と、王棟梁たちは許しておけない。示し合わせて、決起する事にした。なんでも数日後にはこの辺りの祭りがあるという。その晩に決行することにした。部下のうち十名ほどを呼び寄せる。自分の武器も手に入った。あの親子の息子も二人手を貸してくれるという。

荷車に武器を隠し、祭りに出る露天商に扮して中に入ることにした。これだけいけば十分だろう。他にも10人ほど近くに潜ませておく。

この日は、城門の警戒も薄い。城門の上には、「王屯」と大きく描いてある。

×月×日。

門を守っている兵士は、形ばかりの検問をするだけだ。少しばかりの銭を握らせると、「早くいけ」という。露店を張って待っていると、手下の二人がきた。彼らの準備も整って後は合図を待つばかりだという。祭りの終わりに、何発かの火花が打ち上げられるので、それが終わった頃に襲撃することにした。

分隊の者たちは、王の屋敷に潜り込むように言っておいた。夜になった。

深夜である。祭りの酒に酔った者たちも、そろそろ家路につき、眠りについたころだろう。姑娘に言って、大量の酒を、どこかの都会の顔役からだということにして、屋敷に届けさせた。兵士らは、見張りを除いてすっかり酔っぱらってしまっている。露店でも、サービスだと言って、いくらでも酒を振る舞った。その中には、強い眠り薬が入っている。

×月×日。

日付はとつくに変わっている。小さな潜り戸が内側から開けられる。部下の一人が待っている。連れてきた二人とともに屋敷の奥へ入ってゆく。次々と部下が集まってくる。半数を、裏口に回す。一人も逃がさないつもりだ。大きい広間に行くと、この前のように大勢の者がいて、そこら中で酔っぱらって寝込んでいる。寝ぼけ眼でいる家僕を叩き起こして、拳銃を突き付けて奥の部屋に案内させる。部下たちには使用人たちを総て縛り上げるように指示した。

大きい後室の一番奥の寝室に入っていくと、両脇に、女を抱えた王棟梁が、半裸で寝込んでいる。連れてきた家僕の頭を拳銃で撃ち抜く。脳漿が王

の顔当りに飛び散る。びっくりして跳ね起き、目の前の俺を見て声も出ない。

「暫くだな。王棟梁の旦那。遅くなったが、この前のお礼を言いに来た。」

連れてきた二人に通訳させる。あの後恐らく俺の噂を聞いたのだろうこの前の元気はない。顔面蒼白になっている。

「將軍、この通りだ、許してくれ。知らなかったのだ。B棟梁に騙された。命だけは助けてくれ。情け深い將軍だと聞いている。」

「此処の女たちもすべて差し上げる。」

「ここに金庫のカギもある。あの広間の一番の大きい絵の後ろに隠し金庫がある。みんな將軍に差し上げるから、どうか命だけは助けてくれ。大人、お願いだ。大人のモーゼルは、ほらここに大事にもっている。」

差し出す手がわなわな震えている。

「そうか。だが、あんな目にあわされて、許してやるほど俺はお人よしじゃない。」

弾を込めて、王の手足総てに四発の弾を撃ち込む。絶叫を上げてベッドから転げ落ち、大小便を振りまきながら、床を転げまわっている。両脇の女たちは、家僕が撃ち殺されたあたりから、白目をむいて気絶している。部下の者たちが、この家の主だった男たちを連れてくる。それと、あの見張りの者たちもつれてくる。今日も下っ端たちは外の見張りだった。こいつらは、いくらも飲んでいないから、顔面蒼白だ。この男たちも、後から、俺の話聞いたらしい。しばらくの間は警戒していたが、警戒心もいつの間にかゆるんでしまったのだろう。惨状を見てだれも、声も出ない。

一四年式に弾を込め直し、容赦なく一人ずつ、

処刑していく。家僕たちは小さな声で命乞いするもの、失禁するもの。主だったものから、順に弾を撃ち込む。床は一面血の海となる。

部下たちには、広間にいる兵士らを武装解除し、そのうち主だったものを処刑し、そのあと好きにしていっていいと言っておいた。

×月×日

表に出ると、老爺が何か叫んで立っている。手には得物を持っている。女の一人の身内らしい。回らぬ口で何事か罵って位るようだ。部下を制して近づき、腰のモーゼルを抜き、老人のこめかみを打ち抜く。隣の老婆が遺体に取りすがって泣きわめく。その老婆の頭も打ちぬく。私にしてみれば、

「恨み言を言う相手が違うだろう。ここの親玉の所為だろう。」という思いだ。

娘だか孫だかを奪ったのはこの親玉だろう。

此処でそのあとかなり遠くのほうまで広まったらしい。一つの鎮を女子供に至るまで皆殺しにし、生き残ったのは、なんと猫が一匹だけだったという伝説となつてだった。俺はすっかり、「モーゼル將軍」となつてしまった。逆らうものには、血も涙もない冷酷な將軍ということになった。そして率いている部隊も、無敵の強さだということになった。昨日の惨劇のことはあつという間にこのあたりに広がった。

(到着の遅れは、無線で連絡した。)

本隊からは、

「怪しからんから、かまうことはない。もつとやってしまえ。」という声も届いた。

護衛中隊の將校たちは小さくなっている。自分

たちは、不熱心で俺を探そうとしなかったからだ。頭領の屋敷は分隊で占拠した。中隊の面倒は見ない。住民は震えあがっている。生き残った兵士たちも、いつ血祭りにあげられるかと、びくびくしている。死体はすべて大きい穴を掘って埋めてしまった。

金庫を開けてみると、莫大な財産が入っていた。姑娘を呼び寄せて、その管理をすべて任せる。これでとりあえず部隊は当分金には困らないだろう。

×月×日

護衛中隊は先に行かせることにした。こっちは、此処の、王鎮の兵士らを同行させれば、戦力は十分だ。

×月×日

毎日のように、付近の街の顔役たちが手土産を持って、入れ代わり立ち代わり挨拶にやってくる。手土産のないものは、軍閥や国民党軍の情報を持つてくる。

×月×日

毎日のように宴会だ。時には、顔役たちの屋敷に招かれることもある。その時は、これ見よがしにモーゼルをぶら下げてゆく。「モーゼル將軍」の名ははこのあたりでも有名になる。

×月×日

このあたりの裏の情勢にすっかり明るくなってしまった。パンという組織があつて、この前来た、麻薬の男もその一人だ。姑娘もその一つから送り込まれたらしい。

×月×日

ここ王鎮で、二つの秘密組織が手を結ぶことになった。立会人は、中立ということで俺である。黄先生にも立ち会ってもらった。もったいぶった長い儀式の後、どちらの組織の頭目とも、義兄弟の契りを結んだ。これでほぼ中国全土に、つながりを持ったことになる。

×月×日

いつまでもここにいろわけにもいかないから、A鎮から人を送ってもらう。黄先生を此処の頭目にする。

留守部隊から、一個分隊を此処に置くことにした。これでほぼ西に向かう道が確保できたとと言える。物資の運搬が安全になる。

×月×日。

B頭目のことはとりあえず諦めた。いずれ近くに行つたとき思い知らせてやろう。

×月×日。

××打通作戦が始まった。作戦開始には完全に間に合わなくなつてしまった。一日も早くということで、交代の者に後を頼んで、王鎮を出発した。多くの人が見送りに来た。交代の分隊に、大量の銃器を持ってきてもらった。馬と牛車、馬車を使った隊列を組む。総勢、300人ほど。

×月×日。

軍閥と思われる大部隊に襲われる。相手は、千人以上の大部隊だった。事前に姑娘の使いだというものが宿所に現れ、教えてくれたので、手ぐす

ね引いて待ち受けていた。どうやらこれから向かう相手に頼まれて、やってきたらしい。休憩して如何にも油断しているふりを装い、物陰には重火器を潜ませておいた。

こちらの装備は、重機関銃4。重迫撃砲2。これは、40センチほどの巨大な砲弾を飛ばす新兵器である。それに百式短機関銃10。擲弾筒10。これだけあれば、大隊規模以上の敵の軍とも互角に戦える。

数時間にわたる激しい戦いのち、相手は降伏した。こちらが小部隊だと思つて舐めてかかったらしい。

(続く)



(ちえこ)

【ちよつとひついと】

勤労感謝の日とブラックフライデー

木村 進

先月末はハロウィンで、韓国で人が集まり過ぎて、150人以上が亡くなるという痛ましい事故が起きた。ハロウィンはキリスト教の祭りという認識で、ヨーロッパ各地やアメリカ合衆国などで盛んに行われていると思つてきたのだが、最近では日本や韓国でも仮装パレードや子供にお菓子を上げることがメインの一大行事に発展したようだ。イギリスにいる私の娘や孫たちもカボチャをくりぬいて明かりを灯し、それらを並べ、そばに貰つたお菓子などを並べて、笑顔の写真などが毎年送られてくる。日本でも似て非なるこのような行事が行われているのを見たらどう思うだろう。

日本はキリスト教徒でなくともクリスマスとなれば同じように騒いだり楽しんだりしているので、これも一つの日本人的な特徴なのかもしれない。

さて、今月は23日が勤労感謝の日となっている。また祝日ではないがその前の11月22日は語呂で合わせて「いい夫婦」の日だそう。日本の勤労感謝の日というが、これは昔の「新嘗祭(にいなめさい)」で皇室行事として行われてきた。それを終戦後に分離し、ただの感謝の日になったが、これでは意味がわからなくなるとして頭に「勤労」とつけた。昔は日本も経済発展だったので、勤労というイメージがあるが、制定の理由には特に勤労者を指す事ではなく、誰でも働き、収穫を感謝するというのがその趣旨だそう。

だ。

この勤労感謝の日が祝日として施行されたのは昭和23年というから、私の生まれた年だ。

昔、企業戦士としてがむしゃらに働いて(本人が思うだけが・・・)きた頃、私の勤め先では、この日はゴルフコンペの日であったと思う。

私はゴルフはやらないので、休みにも係わらず、殆んど出勤していたように思う。

今から考えれば、もう少し能率のよい仕事を覚えて、楽をするようにすればよかったなどと後悔している。

アメリカではこの勤労感謝の日に相当する日は「サンクスギビング・デー」となるといい、11月の第4木曜日。今年は11月24日だ。

この日には、アメリカのどの家庭でも七面鳥を焼いて親などと共に家族で過ごすという。

昨年のお話だが、バイデン大統領が2羽の七面鳥(ターキー)に恩赦を与えたというニュースが流れた。それまでは、2羽のうち1羽に恩赦を与えていたそうだが、実質は2羽共に余生を無事過ごすようにしていたというから、特に去年に限った事でもないのだろう。いかにもアメリカ的だ。あまり七面鳥を食べない日本人にするとこんな行事さえも何か残酷にも見えてしまう。

まあ、丸々太ったターキーの肉は1羽10ドルもしないらしい。(昨年の話で今年はかなりインフレか?) こんなもの食つて人種と昔戦争して、進め火の玉などといって総玉砕へと間違つた方向を強制したのだから、一部からは軍事予算を増やせと騒ぐのも今の庶民の暮らしを見たらただけない。何とかならないものか。

さて、アメリカではもう一つ「ブラックフライデー」という日がある。ブラックというと少し暗い悪い日のようなイメージを持つが、これは赤字・黒字の黒を意味するので良い事らしい。このブラックフライデーは「サンクスギビングデー」の翌日で11月の第4金曜日だ。

この日は何処も安売り競争となり、そのままクリスマス商戦がスタートするという。

アメリカではサンクスギビングデイの夜に家族と共にガチョウを食べてお祝いし、翌日から年末にかけてクリスマス商戦スタートになるのだ。

アメリカの一般企業の多くがこの金曜日を休日としていて、日本の5月連休のような4連休となり、1年で一番物が売れる日だという。

日本でも最近、ネット商戦などに「ブラックフライデー」なる言葉が見かけるようになり、各種割引、お徳な物を売り出そうと、あちらこちらでこの言葉が踊り始めた。

これも少し前のハロインが日本に入り始めた頃に似ている。

日本は10月末に騒いで、11月末にも騒ぎ、年末にもう一騒ぎさせられるのかもしれない。

まあ、わしらのような年寄り世帯には何のことか分らずに物価上昇に財布の紐も硬くなり、「じつと手を見る」でいるしかないかもしれない。



【特別企画】

打田昇三の太平記(27) 卷第十二・2

○亀寿殿を信濃へ落とさしむる事、

付・左近大夫は偽って奥州へ落ちる事

北条方の武將で幕府執権の弟・四郎入道に仕える諏訪左馬助の子・三郎盛高は数度の合戦で多くの家臣を失い主従二騎で本陣に辿り着き「…今は是迄と存じます。最後のお供をする為に戻って参りました。御主君に置かれては早く切腹をして下さい…」と勧めた。然し四郎入道は聞かず、身近の者を遠ざけてから声を擧げて盛高に言った。

「…当家の滅亡は避け難く其の原因は執権殿の振る舞いが人望に背き神慮に違ったことに有る。然し一族数代の中で善幸を施す者があれば神がお救いくださる例は古代中国の歴史にも見られる。我々は其の事を思い軽々しく自害などしてはならない。現在の危機を脱し何処かに潜んで再起を期すべきである。其れを考えて、私は北条の血を引く亀寿、萬寿の兄弟のうち、万寿を信賴出来る者に預けてある…そなたも血筋に当る亀寿を何処かに隠し置けば、時期の到来を待つて、お家再興を図ることも夢では無い！」

盛高は涙を抑え「今迄は一身の安否を御一門の存亡に任せており、生命を惜しむ訳では有りませんが、せめて御前にて自害し二心無き事を示す為此に此処に参りましたが、お話を伺い納得致しましたので仰せに従います…」と答えてから、執権の側室・二位の局(つぼね)の避難先である鎌倉扇谷へ向かった。何も出来ないで居た女房たちは喜んで萬寿らの消息を聞いて来たけれども、情報

漏れることを案じた盛高は涙ながらに「…御一門の方々には御自害されましたが大殿は葛西谷に居られ、御子たちを一目見てから御腹を召されると仰せられたので迎えに参上したのですが…」と答えたから、期待していた女房たちは愕然として嘆き悲しみ、収拾がつかない。

気の毒なので「…実は…」と言いたところを堪えて、声を荒らげ「…武家に生まれし者は幼時から親族との別れを覚悟して置かねばならぬ！大殿がお待ちなので、失礼する！」と言い捨て、

亀寿を奪い取って鎧の上に背負い門外に出た。

女房たちの嘆き叫ぶ声を涙ながらに背に聞いて走り出したが、ふと、顧みると亀寿の乳母が裸足で走って駆けながら追いかけて来るのが見えた。

気の毒だが立ち止まる訳にはいかない。此の乳母は気の毒にも古井戸に身を投げてしまった。

盛高は亀寿を護って信濃に逃れ、諏訪の神官に託したと言う。後に、北条の遺臣が起こし、二十日程で足利尊氏に鎮圧された「中先代の乱」の大將・相模二郎と言うのは此の亀寿とされる。

一方、四郎入道は信賴出来る家臣を選んで「…私は思うところが有り、奥州に落ちて再起を図る。南部太郎と伊達六郎は案内者として同行させるが、他の者は自害して屋形に火を掛け、敵には私が切腹して焼けた様に見せかけるべし…」と言った。

言われた方は大変な事になるが、不本意でも従う他はない。気の毒な二十数人が無駄死にした。

伊達と南部は顔に泥を塗り身形を変えて、敵兵の死骸から頂いた笠を被り、四郎入道に血の付いた衣服を着せ負傷者を運ぶ振りをして脱出した。

主君は無事に脱出したが、残された部下は其れを知らないから「…殿は早や御自害されたらしい。

志有る者はお供しよう！」と勝手に決めて、屋形に火を掛けてから切腹したり火中に飛び込んだ。多くの家臣を犠牲にした四郎入道は、後に凶々しく都に出て西園寺家に仕えたという。

○長崎次郎高重、最後の合戦の事

幕府重臣の長崎次郎高重は、武蔵野の合戦から昼夜を問わず八十余度も戦い続けたので当然ながら多くの家臣を失い、残る兵力は僅かに百五十騎ほどになってしまった。其処に情報が届き、五月二十二日に敵が鎌倉の谷々へ乱入し幕府軍の諸大將が討たれた！」と言う。味方の危機であるから敵を選んでは居られず、強引に突き進んでようやく相模入道が潜伏しているであろう葛西谷に入り中門前で涙ながらに叫んだ。

「高重、数代奉公の義を忝くして、朝夕恩顔を拝し奉る御名残、今生にては今日を限りと覚えます。是まで数か所の敵を討ち散らして参りましたが、既に敵は鎌倉中に充滿して居り、是を討つことが出来ません。此の上は、唯、敵の手に掛かれることの無い様に、また、此の高重がお勧めするまでは御自害などなさらぬ様に！お上が御存命の間は、私も今一度、敵陣に駆け入り、一合戦してから冥途への旅にお供するつもりです！」

叫ぶ声は聞こえたが、迂闊には姿を見せられないので相模入道は名残惜しげに是を見送る。此の日の長崎次郎は死を覚悟しており、兜を捨て日月を象った大鎧に赤糸で飾った腹巻を着け、坂東一と言われた名馬に金色の鞍を置き、一際、目立つ小房の馬具を飾っていた。

合戦の前に、高僧として知られた南山和尚の許を訪れ庭に居た和尚に「勇士の心構え」を訊ねた。

和尚は「吹毛急に用いて前にしかず」と答える。「平常心」を論したのである。

其れを聞いた高重は悟りを得たようで馬を引き寄せ百五十騎を従えて戦場に戻り、敵味方を識別する「笠印」を捨てさせてから混乱を利用して敵陣に紛れ込んだ。新田義貞を探し、組み討ちする気である。義貞に近づいたのだが、運悪く、顔見知りの武士が敵方に居て「旗も差さずに近づくのは敵方の長崎次郎で有るぞ！知られた勇士なれば油断するな！」と叫ばれてしまった。

その場を守って居たのが武蔵七党の三千余騎であるから退く間も無く高重らは包囲され、両軍激戦を展開した。然し、三千と百五十とは均等に減つても少ないほうが負ける。高重は生き残つたが兵力は八騎しか居無くなった。其れでも新田義貞を狙い続けていたところ、武蔵国の横山太郎が組もうとして来た。「余計なことをするな！」とも言えないので、太刀で相手の正面から斬つた。横山は即死したが其の反動で馬も倒れた。

是を見た庄（しょうの）三郎が大手を広げ挑戦して来たので高重は笑いながら「横山の代りと思うが相手をしよう。しかし私に勝てるとは思ふな！」と相手の鎧を掴んで敵方に投げ飛ばした。其の力が強かつたので着地点に居た二人の騎馬武者が衝撃で落馬し、討死では無く事故死した。

奮闘はしたが敵が多すぎたので諦めた高重は、大音声で「恒武天皇第五の皇子葛原親王から三代の孫・平将軍貞盛から十三代、前相模守高時の管領・長崎入道圓喜の嫡孫・次郎高重、武恩に報ずる為、討死にする。高名せんとする者は寄つて組め！」叫びつつ、鎧の袖や草摺りなどを引きちぎり切り落とし無防備の姿で太刀も鞘に収め、馬上に大手を広げ戦場を走り回った。

是を見て驚いたのは敵では無く高重の家臣たちである。其の行く手を遮り「如何なる事を為されるか！本陣で戦うべきなのに！敵は既に本陣に乱入し諸々に火を掛け乱暴の限りを尽くしており

ます。一刻も早く戻られ、御主君に自害をお勧め下さい！」と進言した。聞いた高重は「敵が逃げるのが面白いので、つい任務を忘れていた！直ぐ戻ろう！」と他人事のように言つてから主従八騎で本陣へ向かうとした。

ところが是を見た敵は「逃亡する！」と思い、「逃げるとは卑怯であるぞ！」などと勝手な事を言い乍ら五百騎の大軍で追い掛けて来る。高重はかまわずに居たのだが余りにもしつこいので山内から葛西谷口へ行くまでに十七度も戦つて五百の敵を撃退した。当然だが鎧には敵の矢が二十数本も刺さっており、其の姿で葛西谷に行つたから迎えた一同は驚いたが、高重の武勇で最後に近い北条一族も少し心が安らいだのである。

（続く）

講演会のお知らせ（入場無料）

題目…歴史　〜今　伝えたいこと〜

講師…今泉文彦

日時…11月20日（日）13：30～15：00

場所…石岡市まちかど情報センター

主催…石岡歴史塾Ⅱ

参加希望の方は「まちかど情報センター」（0299-27-5171）へ予約が必要です。